



ふるさと読本

# いずも神話



## はじめに

島根県には、神々のお話が「神話」としてたくさん伝えられています。

そのしまねに関わる神話の多くが収められた「古事記」が作られて、平成二十四（二〇一二）年で一三〇〇年になります。

これらの神話には、死者の世界をおとずれ命からがら帰ってきたり、頭が八つもある大きなオロチを退治したりと「はらはらどきどき」の冒険をするお話や、若い男女の神が結ばれる恋のお話、現在私たちが住んでいる場所の名前の由来など、全国に誇る有名な神話がたくさんあります。

このふるさと読本『いずも神話』では、その中から八つのお話を紹介しています。神話のことをよく知らない人はもちろん、今までに聞いたことがある人でも神話のおもしろさをもっと味わうことができるとおもいます。

さあ、『いずも神話』のページをめくって、「神々の国しまね」を訪ねてみましょう。

目次

○イザナキノミコトの黄泉の国訪問 ..... 1

○スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治 ..... 7

○オオクニヌシノミコトの物語 ..... 15

○国引き ..... 23

○出雲の国の地名のおこり ..... 27

・アジスキタカヒコノミコトと三沢郷 ..... 28

・恋山 ..... 30

・サダノオオカミと加賀潜戸 ..... 32

・海神と海潮郷 ..... 34

学校の先生方へ ..... 38

ふるさと読本『いずも神話』を  
読むにあたって

『古事記』や『出雲国風土記』  
では、神様の名前は、漢字で書か  
れています。この本では読みや  
すくするためにカタカナであらわ  
しています。

また、各神話の終わりにはわか  
りにくい言葉の意味などの説明が  
書いてあります。市町村名につい  
ては平成二十三年十月一日現在で  
書いています。

なお、神話は、もともと口で語  
りつがれてきたものでした。目で  
読むだけではなく、ぜひ声を出し  
て読んでほしいと思います。

イザナキノミコトの黄泉よみの国くに訪問ほうもん



死しんだ人ひとは黄泉よみの国くにへ行いく・・・。

昔むかしの人ひとは、そう考かんがえていました。



天と地が初めてあらわれたとき、大地は水にうかんでいるあぶらのように、また、くらげのようにふわふわとただよっていました。高天原の神様たちは、イザナキノミコトとイザナミノミコトという男女の神に命

じました。

「このただよっている国を固めて仕上げなさい」

イザナキとイザナミは、天の浮き橋に立って、天の沼矛を大地にさし下し、「こおろ、こおろ」とかき鳴らして引き上げると、矛の先からしたり落ちた塩が積もりに積もってオノゴロ島となりました。

この島に降り立ったイザナキとイザナミはたくさんの子どもを作りましたが、イザナミは、燃えさかる火の神を生んだため大やけどをして死んでしまいました。

イザナキは、妻のイザナミをひと目見ようと思い、黄泉の国まで追いかけて行きました。そして、イザナミが黄泉の国の御殿で出むかえた時に、心をこめて言いました。

「いとしい私の妻よ。私とおまえが作ろうとしている国はまだできていない。だから、この世の国に帰ってきてくれ」

しかし、イザナミは、

「あなたが早くいらっしやらなくて残念です。私は、黄泉の国で作った食べ物(8)を口にしてしまったので、もう帰れません。でも、いとしい私の夫よ。あなたが来てくださったので、黄泉の国の神と相談(9)しましょう。」

その間、けっして私を見ないでください」

と言って、黄泉の国の御殿の中に入りました。

その間(10)がたいへん長くて、イザナキは待っていられなくなり、髪(11)の左のみづらにさしていた、くしの歯を一本折って火をともし、御殿の中に入りイザナミの姿を見失いました。

なんと、イザナミの体にはうじ虫がたかって「ころころ」

とうごめいており、頭、胸、腹などには雷神(12)がいるではありませんか。

イザナキは恐れおののき、黄泉の国から逃げ帰ろうとしたが、イザナミは、

「よくも私に恥をかかせたわね」

と言って、ヨモツシコメ(13)に後を追わせました。





とうとう、イザナミ自身が追いかけてきました。

イザナキが逃げながら黒つる草の髪かざりを投げると、地面に落ちてやまぶどうの木が生えました。シコメがやまぶどうの実を拾って食べている間にイザナキは逃げました。

しかし、また追いかけてくるので、イザナキが右のみづらにさしていた竹のくしの歯を折って投げると、今度はたけのこが生え、シコメがそれを抜いて食べている間にイザナキはまた逃げました。

そこで、イザナミは、自分の体にいた雷神達に千五百の軍勢をつけて追いかけさせました。イザナキは、剣を抜いて体の後で振りながら逃げました。しかし、まだ追いかけてきます。

イザナキが、黄泉比良坂のふもとに来た時に、そこに生えていた桃の木から実を三つ取り、待ちかまえて投げつけたところ、雷神達は黄泉の国に戻っていきました。

イザナキは、千人で引くほどの重い大きな岩で、黄泉比良坂をふさぎ、その岩を間に置いて向かい合って立ちました。

イザナミは、言いました。

「いとしい私の夫よ。あなたがこんなこ

とをするのなら、あなたの国の人を一

日千人、殺してやるわ」

イザナキがこたえました。

「いとしい妻よ。おまえが千人殺すなら、

私は、一日に千五百の産屋を建てよう」

こういうわけで、一日に必ず千人死に、

千五百人が生まれるようになったと伝え

られています。

このお話に出てくる黄泉比良坂は、出雲の国の「伊賦夜坂」のことであると言われています。





「イザナキノミコトの黄泉の国訪問」の神話について

この神話は、今からおよそ千三百年前の『古事記』という本に書かれています。神話が作られたのは、亡くなるまでそのまゝ石の棺の中に入れてました。今のように遺体を焼いたりしないので、だんだんとかさっていききました。

この神話は、その頃の人々の死に対するおそれや、死後の世界についての思いを書いたものと思われまます。

死んだ人は黄泉の国へ行くと考えられており、その黄泉の国の入り口としては、この神話に出てくる黄泉比良坂以外にも『出雲国風土記』に黄泉の坂、黄泉の穴が書かれています。その場所については、一般的には出雲市猪目町の猪目洞くつではないかと言われています。黄泉の国の入り口が島根県にあったと考えられていたのは、ちよつと驚きですね。



- 【神話に出てきた言葉の意味】
- (1) 神々がいる天上の世界。
  - (2) 天と地上の間に浮かんでいる橋。
  - (3) 玉がたくさんついている矛。(※1)

- (14)
- (13)
- (12)
- (11)
- (10)
- (9)
- (8)
- (7)
- (6)
- (5)
- (4)

カラカラという音のこと。  
しぜんに固まった島の意味。  
死んだイザナミの墓の場所については、いろいろな言い伝えがあります。(※2)

死んだ人間が行く国。  
黄泉の国の食べ物を食べると、黄泉の国の人々の仲間になると考えられていました。  
左右に分けた髪を、耳のあたりで束ねたもの。  
くしは、悪いものを遠ざける道具として考えられていました。  
黄泉の国の醜い女という意味ですが、力の強い女という意味もあります。  
黄泉の国とこの世との境にある坂。(※3)

桃も悪いものを遠ざける果物として考えられていました。(※4)

「伊賦夜坂」は松江市東出雲町揖屋にあったと伝えられています。(※5)



みづら

【先生方への解説】

- \*1 矛は両刃の剣に長い柄をつけたような形の武器。
  - \*2 松江市八雲町には、宮内庁が指定する「岩坂陵墓参考地」があります。他にも、松江市八雲町の熊野山、松江市鹿島町の佐陀山、松江市大草町の御崎山古墳、安来市広瀬町南端の御墓山、安来市伯太町の比婆山御陵、奥出雲町の猿政山・灰火山などがあります。
  - \*3 比良には崖の意味があります。黄泉の国と地上の世界との境にある坂は、断崖絶壁のように急な坂と考えられていたのでしょう。
  - \*4 古代の遺跡からは、桃の実がたびたび出土しています。(県内では松江市八雲町前田遺跡・出雲市青木遺跡など)
  - \*5 江戸時代に書かれた『雲陽誌』によれば、意宇郡東岩坂(松江市八雲町岩坂)に小麻加恵利坂という場所があり、ここでイザナキが桃の木の下に隠れながら桃の実を雷神に投げつけたという伝承が残されていたようです。
- ※5 ここには揖夜神社があり、一九四〇年、松江市東出雲町揖屋平賀に「神蹟黄泉平坂伊賦夜坂伝説の地」と書かれた石碑が建てられました。

スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治たいじ



ヤマタノオロチは、毎年まいとしのように  
出雲いずみの国くにをおそう怪物かいぶつです。

その姿すがたは・・・。

スサノオノミコト<sup>(1)</sup>という神様がいました。

スサノオは姉神<sup>あねがみ</sup>のアマテラスオオミカミのおさめる高天原<sup>たかまがはら</sup>で、田<sup>た</sup>のあぜをこわしたり、神聖<sup>しんせい</sup>な御殿<sup>ごてん</sup>に「くそ」をまきちらすなど、多くの罪<sup>つみ</sup>を重ねました。アマテラスは、

はじめはかばっていましたが、とうとうおそれをなして「天<sup>あめ</sup>の岩屋<sup>いわや</sup>」<sup>(2)</sup>にかくれてしまいました。そのため、世界<sup>せかい</sup>に闇<sup>やみ</sup>がおとずれ、いろいろな

災<sup>わざわ</sup>い<sup>(3)</sup>がおこったために、高天原<sup>たかまがはら</sup>の神々<sup>かみかみ</sup>はスサノオを神<sup>かみ</sup>やらいに追<sup>お</sup>い<sup>(4)</sup>払<sup>はら</sup>いました。

高天原<sup>たかまがはら</sup>から追<sup>お</sup>い<sup>(5)</sup>払<sup>はら</sup>われたスサノオは、出雲<sup>いずも</sup>の国<sup>くに</sup>の肥<sup>ひ</sup>の河<sup>かわ</sup>のほとり、鳥髪<sup>とりかみ</sup><sup>(6)</sup>というところに降<sup>お</sup>り<sup>(7)</sup>立<sup>た</sup>ちました。

そのとき、はしが流<sup>なが</sup>れてきたので、

「この上流<sup>じょうりゅう</sup>に人<sup>ひと</sup>が住<sup>す</sup>んでいるにちがいない」

と、人<sup>ひと</sup>をさがしに、上流<sup>じょうりゅう</sup>へ上<sup>のぼ</sup>っていきました。

しばらくいくと、おじいさんとおばあさんが、

娘<sup>むすめ</sup>をかこんで、泣<sup>な</sup>いていました。



スサノオが、

「お前たち、なぜそんなに泣いているのだ」

とたずねると、

「私には、八人の娘がおりましたが、

あの高志のヤマタノオロチが毎年やってきて食べてしまいました。

今、またやってくる時期なので、泣いているのです」

と答えました。

「そのヤマタノオロチはどんな姿をしているのだ」

「オロチは赤く大きな目をして、一つの胴体に、

八つの頭、八つの尾があります。その体には苔ばかりか、

杉や檜まで生えており、長さは、八つの谷をわたり

八つの山をこえるほどです。その腹はいつも血がにじんで、

ただれています」



それを聞いたスサノオは言いました。

「娘と結婚させてくれ。」

「私が、オロチを退治してやろう。」

「失礼ですが、まだ、お名前さえ知りません。」

「私は、アマテラスの弟で、スサノオという者だ。」

「おそれ多いことです。」

「ぜひ、娘と結婚してください。」

スサノオは、さっそく、その娘、クシナダヒメを

くしにかえ、自分の髪にさして、

おじいさん、おばあさんに言いました。



「おまえたちは、強い酒をたくさん造れ。」

また、垣根を張りめぐらし、そこに八つの門を作り、

それぞれの門ごとに台をこしらえて、

その上に、強い酒をたっぷり入れたおけを

おいておくのだ」

おじいさんと、おばあさんは、言われた通り、

すっかり準備して、オロチが現れるのを、

今か、今かと待っていました。

すると、ごうごうという山鳴りとともに、

ヤマタノオロチが現れたのです。

すぐに、八つの頭をおけにつっこみ、

台の上のお酒を飲みはじめました。



そのうちに、オロチは酔いつぶれて、寝入ってしまった。

その姿をよく見ると大きなへビではありませんか。

ここぞとばかり、スサノオは、腰につけていた剣をぬいて、

そのオロチをずたずたに切りすてました。

肥の河は、流れ出たオロチの血で、真っ赤に染まってしまいました。

オロチの中ほどの尾を切ったとき、スサノオの剣の刃が欠けたので、

これはおかしいと、その尾をさいてみると、

そこから、りっぱな剣が出てきました。

これは不思議なものだということ、アマテラスに

差し上げることになりました。

こうして、スサノオは、クシナダヒメと結婚しました。



そして、二人で、宮を建てる場所をさがしもとめて、

出雲の国の各地をめぐるしました。

ある場所に来たときに、

「私はここにきて、すがすがしくなり、気持ちが悪くなった」

とスサノオが言ったので、宮を作り、住むことにしました。

そこを、今は、須我といひます。

宮ができること、ふしぎなことに、その地から雲が立ち上り、

それを見たスサノオは、

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに

八重垣作る その八重垣を

という歌をよみました。





「スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治」の神話について

この神話は、島根県に古くから伝わってきた神話の中で、最もよく知られている神話の一つです。スサノオがどのようにして生まれ、なぜ高天原を追い払われたのかをお話ししましょう。

黄泉の国から帰ってきたイザナキは、日向の国に行つて体を清めました。左の目を洗ったときにアマテラスオオミカミが、右の目を洗ったときにツキヨミノミコトが、鼻を洗ったときにスサノオノミコトが生まれました。

イザナキはアマテラスに高天原を、ツキヨミに夜の世界を、スサノオに海の国をそれぞれ治めなさいと命じましたが、スサノオは母に会いたいと泣いてばかりで、海の国を治めようとしませんでした。

イザナキは腹を立て、スサノオを追放しました。スサノオは姉神のアマテラスに一度会つてから根の国に行こうと、姉神の治める高天原に行きました。

高天原に着いたスサノオが、乱暴に歩いて大地が激しく揺れ動いたので、アマテラスは自分の国をスサノオが奪いにきたのだと思い、戦いの準備を始めました。国を奪いに来たのではないことを証明できたスサノオは、勝ちほこつて多くの罪を重ねてしまいました。

【神話に出てきた言葉の意味】

- (1) スサノオという名前には、「勇かんで激しい勢いのある男」という意味や「須佐の地の男」という意味があります。
- (2) 岩の間にできたほら穴。

- (3) アマテラスは、天で光り輝く神でしたので、岩屋にとじこもつてしまふと天も地上も真っ暗になり、悪い神々があばれるようになりました。
- (4) とことんまで追放すること。「やらふ」には、くりかえしくりかえし追いはらうという意味がこめられています。
- (5) 斐伊川のこと。
- (6) 仁多郡奥出雲町鳥上山地区。（\*1）北陸地方のこと。
- (7) 口の中であんで作った特別なお酒。
- (8) この剣を草薙の剣と言います。（\*2）
- (9) 雲南市大東町須賀。（\*3）
- (10) たくさんの雲が沸き立つ出雲の国の八重垣よ、妻を隠すために垣根を作つたのだ、素晴らしい八重垣を
- (11) この歌が和歌のはじまりと言われています。



【先生方への解説】

- \*1 ここは元は鳥髪村で、付近には斐伊川の源流である鳥上山（船通山）がそびえています。
- \*2 この剣は、アマテラスの孫ニギノミコトが天から地上へ降りるときに授けられ、伊勢神宮に祭られた後、ヤマトタケルノミコトが東の国々を平定するときにも使われたといわれています。天皇家のヤタノ鏡やヤサカニノマガ玉と共に三種の神器として重視されました。
- \*3 ここには、スサノオを祭神とする須我神社があります。

# オオクニヌシノミコトの物語

ものがたり



オオクニヌシノミコトを知しっていますか？  
イナバノシロウサギを助たすけた、心こころやさしい神かみさま様です。  
オオクニヌシは若わかいころ、オオアナムチノミコト  
と呼よばれていました。

オオアナムチノミコトという神様がいました。

オオアナムチには、たくさんの兄弟の神々がいましたが、

何度も命を落とすような危険なめにあわされていました。(1)

そこで、オオアナムチは木の国のオオヤビコのところへ逃げましたが、

そこにも兄弟の神々が追いかけてきたのです。

オオヤビコはオオアナムチを逃がしながら言いました。

「スサノオのいる根の国へ行きなさい」

オオアナムチは、根の国に逃げてきて

スサノオの娘であるスセリビメと会いました。

オオアナムチとスセリビメは、一目会って

お互いを好きになりました。

スセリビメは、父神のスサノオに、オオアナムチを会わせました。

「りっぱな方がいらっしやいました」





スサノオは、オオアナムチを試ためしてみることになりました。

まずスサノオは、オオアナムチを「へびの室むろや」<sup>(4)</sup>に寝ねかせました。

そこには、へびがうようよいて、今いまにもオオアナムチにかみつきそうです。

心配しんぱいになったスセリビメは、肩かたにかけていた、ひれ5)をわたして言いいました。

「へびが、かみつきそうになったら、このひれを三度みたび、ふってください」

オオアナムチが言いわれた通とおりにすると、へびは動うごかなくなり、かみつきませんでした。

オオアナムチは、無事ぶじに「へびの室むろや」から出でることができました。

次つぎにスサノオは、オオアナムチを「ムカデとハチの室むろや」に入いれました。

そこには、ムカデやハチがたくさんいて、今いまにもオオアナムチにおそいかかりそうです。

スセリビメは、肩かたにかけていた、もうひとつのひれをわたして言いいました。

「ムカデやハチがおそってきたら、このひれを三度みたび、ふってください」

オオアナムチが言いわれた通とおりにすると、ムカデやハチは静しずかになり、おそってきませ

んでした。オオアナムチは、無事ぶじに「ムカデとハチの室むろや」から出でることができました。

今度スサノオは、オオアナムチを大きな野原に連れて行きました。

そして、音の鳴る矢を放ち、探してくるよう命令しました。

オオアナムチが野原に入るやいなや、

スサノオは火を放ち、

野原を炎で囲みました。

オオアナムチは、たちまち火に取りまかれました。(6)

すると一匹のネズミが出てきて、言いました。

「内はほらほら、外はすぶすぶ」(7)

「なるほど、そういうことか」

地面を踏むと穴ができて、オオアナムチはそこに落ちて、かくれることができました。





火が通り過ぎ、助かりました。しばらくすると、ネズミが音の鳴る矢を探して、持ってきました。でも、おかしなことに、矢についていた羽根がありません。

矢の羽根は、子ネズミたちが全部、食べてしまったのです。

矢を返すとスサノオは、オオアナムチを家に連れて帰り、いっしょに大きな大きな室に入って、また命令しました。

「わたしの髪の中にある、シラミを取れ」

オオアナムチは、言われた通りに頭をのぞいてみました。すると、シラミではなく、たくさんムカデがいるではありませんか。スセリビメは、むくの実と赤土を持ってきて、オオアナムチに渡しました。そして、耳元で、こうささやきました。

「この実をかんで、赤土を口にくみ、いっしょにはき出してください。父は、あなたがムカデを一匹ずつかんで退治している、と思うでしょう」

スセリビメの言った通りです。スサノオは、

「ムカデをかんで退治しているとは、

なかなかかわいげのあるやつだ」

と思つて安心し、寝てしまいました。

「今だ、いっしょに逃げよう！」

オオアナムチは、スサノオの長い髪を室の垂木に結びつけ、

大きな石で家の戸をふさぎました。

そして、スセリビメを背負い、

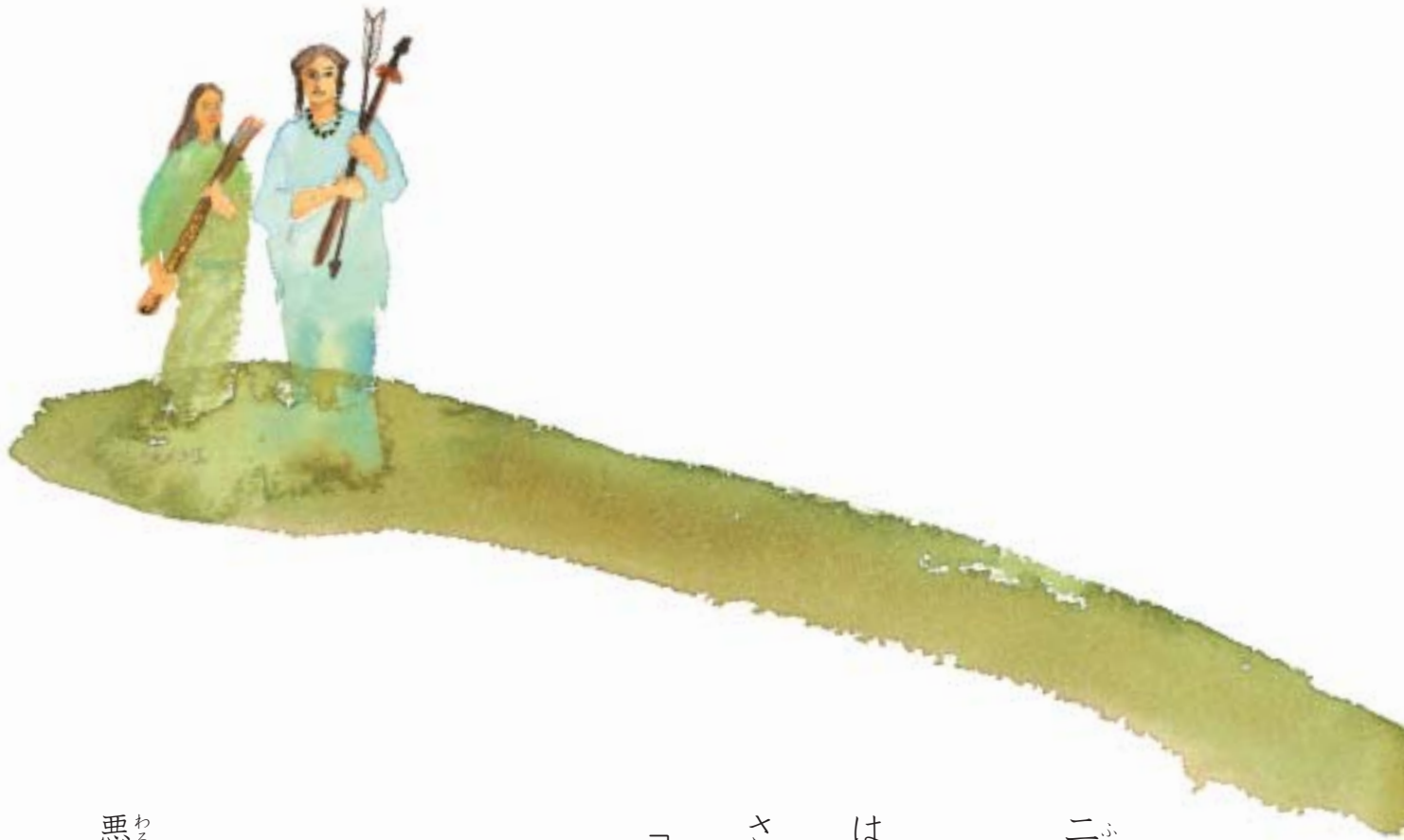
スサノオの生太刀、生弓矢と、天の沼琴をうばって逃げました。

そのとき、琴が木に触れ、大地がゆれて鳴りひびきました。

目を覚ましたスサノオは、起き上がりながら、

大きな室をひきたおしてしまいました。





スサノオが垂木に結ばれた髪をほどいている間に、

二人は遠くまで逃げていきました。

スサノオは、黄泉比良坂まで追いかけてきましたが、

はるか向こうに逃げていく二人に向かって

さげびました。

「お前の持っている生太刀と生弓矢で兄弟の神々をおいはらえ。

そして、オオクニヌシと名のり、

スセリビメと宇迦山のふもとに柱を太くして

天までとどくような宮を建てて住め」

このようにして、オオクニヌシノミコトとなったオオアナムチは、

悪い兄弟の神々を追い払い、国を作ったのでした。



「オオクニヌシノミコトの物語」の神話について

島根県では、オオクニヌシノミコトとして広く知られていますが、『古事記』ではオオクニヌシノカミとして書かれています。

オオクニヌシは非常に名前の多い神で、『古事記』ではオオクニヌシノカミ、オオアナムチノカミ、アシハラノシコノカミ、ヤチホコノカミ、ウツシクニタマノカミの五つもの名前が使われています。また、『日本書紀』ではオオモノヌシノカミ、オオクニタマノカミ、『出雲国風土記』ではアメノシタツクラシオオカミの名前が使われています。

『古事記』に書かれているオオクニヌシの神話は、長い物語です。皮をはがれたウサギを助ける「イナバノシロウサギ」から始まり、兄弟神やサノオから与えられる「試練の物語」、「出雲の国の国造り」、「出雲の国の譲り」まで続きます。この本には、オオクニヌシがサノオから与えられた試練に打ち勝つ物語をのせました。

オオクニヌシは出雲の国を代表する神として、出雲大社に祭られています。旧暦の十月には、全国の神々がオオクニヌシのもとに集まることから、出雲地方以外では十月を「神無月」（神が出雲の国に出かけていなくなる月）といいます。出雲地方では「神在月」（全国の神々が出雲の国に集まる月）といいます。

### 【神話に出てきた言葉の意味】

(1) オオアナムチは兄弟神から、イノシシだとウソをつかれ真っ赤に焼いた大きな石を抱き止めさせられたり、大きな木の割れ目に入らされ、はさみつぶされたりして何度も死にましたが、そのたびに母神に助けられ生き返ったということです。

(2) 今の和歌山県のこと。（\*1）

(3) 家など建物の神。

(4) 出入り口はあるが窓のない建物。

(5) 長いスカーフのような布。

(6) ササノオは火を使って狩りをする力が、オオアナムチにあるかどうかを試しているのです。

(7) 「内側はがらんどろ、外側はすぼまっている」という意味。

(8) 屋根を支える、長い木材のこと。

(9) 力のある太刀と弓矢のこと。（\*2）

(10) 玉で飾られた琴。（\*3）

(11) 出雲大社の東側の山々。（\*4）



室（むろや）

### 【先生方への解説】

\*1 紀伊の国ともいいます。島根県と和歌山県にはどちらも熊野という地名があります。熊野大社という神社があります。

\*2 この太刀と弓矢を手にするのは、地上世界の王者となったことを意味します。

\*3 琴を弾くと神が出現して、お告げを聞くことができる道具として考えられています。オオアナムチは、この琴を手にしたことで、祭りによって神のお告げを聞きながら国土を支配する王者となりました。

\*4 出雲市に奥宇賀町・口宇賀町という地名があり、宇賀川が流れています。そのあたりの一体の山を指したと思われる。あるいは、出雲大社背後の御崎山を指しているのかもしれませんが。

国くに

引ひ

ま



その昔むかし、出雲いずもの国くには細長ほそながい小ちいさな国くにでした。

そこで、神様かみさまは出雲いずもの国くにを大おおきくするためために……。

昔、ヤツカミズオミツノノミコトが、出雲の国を見て、

「八雲立つ出雲の国は、細長い布のように小さく、まだこれからの国だ。

どこからか国を引いてきてぬいつけなくては」

と思い立ちました。海の向こうを見渡して、

新羅という国を見みると、国のあまりがありません。

そこで、大きなすきを手にとって、

大きな魚の身をさくように新羅の土地を

ぐさりと切りはなしました。

そこに、三つよりになった強い綱をかけ、

霜枯れたかづらを「くるや、くるや」と

たぐり寄せるように、また、河船を

「もそろ、もそろ」と引くように、

「国来、国来」と、言いながら、

引き寄せました。



そうして、ぬいつけた国が、

杵築のみさき（出雲市の日御碕から小津付近）です。

このとき、引き寄せた国を固めるために

立てたくいが佐比売山（三瓶山）になり、

引いた綱は、園の長浜となりました。

そのあとも、北方の国から狭田の国や闇見の国を

引き寄せて、最後に北陸の都都のみさきから、

美保のみさきの国を引き寄せました。

このとき、国を固めるために立てたくいが

火神岳（鳥取県の大山）になり、

引いた綱は夜見島（弓ヶ浜）になりました。

こうして国引きを終えたヤツカミズオミツノは、

「今、国引きを終えたぞ」

と意宇の杜に杖をつきたて、「おう（おえ）」と言いました。



「国引き」の神話について

国引き神話は『出雲国風土記』に書かれている神話です。

島根県の形を地図で見ると、東部に宍道湖と中海があり、島根半島がくっついたような形に見えます。

下の図のように、今から七千年前には、宍道湖の西側は日本海とつながっていました。

それが、五千年前に、斐伊川が運んできた土や砂によって埋め立てられ、宍道湖ができました。二千四百年前には海面が下がり、中海に弓ヶ浜半島が誕生しました。

このような地形の変化を奈良時代の人々は知らなかったはずですが、島根半島をひっぱってきて国引きをした話としてまとめました。昔の人の想像力はすごいですね。

国引きの図



2,400年前（弥生時代）



5,000年前（縄文時代前期末）



7,000年前（縄文時代早期）



出典：『宍道湖・中海その環境と生物』国際生態学シンポジウム組織委員会

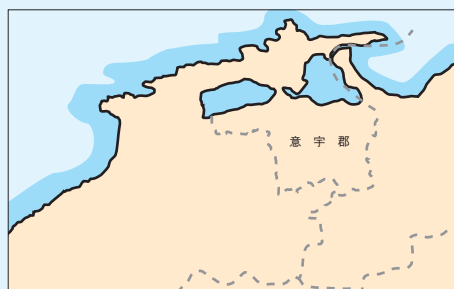
【神話に出てきた言葉の意味】

- (1) 国引き神話は、「出雲国意宇郡」の名前の由来から始まります。意宇郡は、現在の安来市から松江市宍道町あたりにあります。（\*1）
- (2) たくさんの水を操る神という意味です。（\*2）
- (3) 古代の朝鮮半島東南部にあった国。
- (4) 霜がおりるころの葉が落ちたかざらること。
- (5) 霜がおりると引きずるようにたぐり寄せること。
- (6) 川の上流に向かって船を引き上げること。
- (7) 「国来い、国来い」の意味。
- (8) 隠岐の島前・島後の島々。
- (9) 現在の松江市鹿島町から松江市島根町に存在した国。（\*3）
- (10) 中海沿岸に存在した国で、松江市新庄町に久良弥神社があります。
- (11) 能登半島の先のあたり。

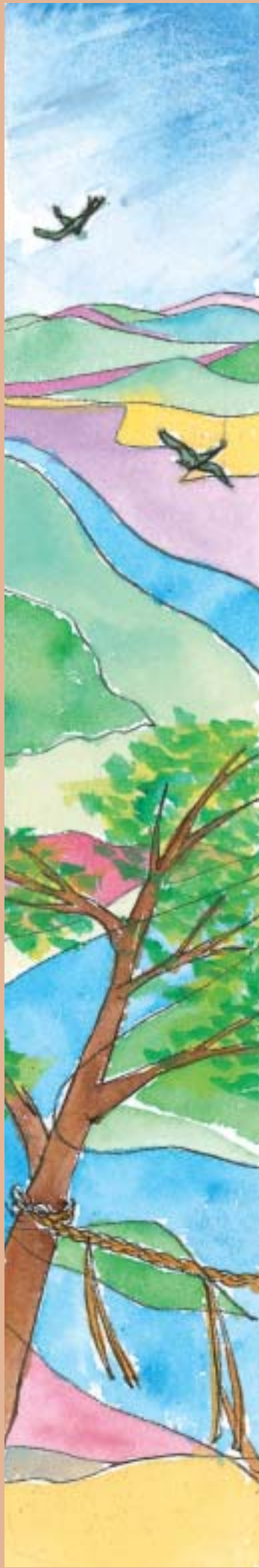
【先生方への解説】

- \*1 出雲の国の中心として、出雲国庁、出雲国分寺、出雲国分尼寺などが置かれました。
- \*2 ヤツカミズオミツノミコトは「八束水臣津野命」と書き、この神を祭る神社としては、出雲市西園町の長浜神社、出雲市斐川町富村の富神社などがあります。
- \*3 佐太神社は狭田の国の人々が信仰していた神が祭られています。また、松江市の上佐陀町・下佐陀町・古志町・薦津町・浜佐田町・西浜佐陀町・古曾志町一体に「佐太水海」と呼ばれる大きな湖がありました。

この神話は意宇郡の地名の由来を語ったものですから、国引きした後ヤツカミズオミツノは「おう」というのが自然ですが、出雲国風土記には「意恵（おえ）」と書かれています。「おう」なのになぜ「おえ」と書かれたのかは、『出雲国風土記』最大の謎と言えるでしょう。



出雲いずもの国くにの地名ちめいのおこり



出雲地方いずもちほうには、その場所ばしょにちなんだ  
いろいろな神話しんわが残のこされています。  
皆みなさんの近ちかくには、どんな神話しんわがありますか？

アジスキタカヒコノミコトと三沢郷みざわのさと



昔むかし、出雲いずもの国くににアジスキタカヒコノミコト(1)という神様かみさまがいました。

この神かみはヒゲひげが八やつかみの長さながになる大人おとなになっても、夜よるとなく昼ひるとなく泣ないてばかりで、言葉ことばも通つうじませんでした。

そこで、父神ちちがみのアメノシタツクラシオオカミ(3)は、高たかい建物たてものを建たて、泣なきじやくる息子むすこの手てを引ひきながら登のぼったり降おりたりしました。

それでも泣なきやまないのので、今度こんどは船ふねに乗のせて八十島やそしまめぐり(4)をしましたが、相変あいかわらず泣ないてばかりいます。

困こまった父神ちちがみは、

「なぜ私わたしの息子むすこは泣ないてばかりで話はなすことができないののか、

夢ゆめの中なかで教おしえてください」

と祈いのりました。

その夜よる、父神ちちがみは、息子むすこが話はなすことができるようになった夢ゆめをみました。

めざめた父神は、さっそく、アジスキタカヒコに話しかけてみると、なんと、「御沢」としやべるではありませんか。

「それはどこだ」

と父神がたずねると、突然、アジスキタカヒコは立ち上がり、

石がごろごろとしている川の上流へ向かって、

どンドン歩いていきます。

アジスキタカヒコは、坂を上った所で

立ち止まり、父神の方を振り返りながら

沢を指さして言いました。

「ここです」

アジスキタカヒコが指さした場所からは、

こんこんと水がわき出ていました。(6)

アジスキタカヒコは、その水で身を清め、

体にまとわりついている災いのもとをすっかり洗い流したのです。





恋したい

山やま



奥出雲町おくいづもちょうに「鬼の舌震おに したるい」と呼よばれている場所ばしょがあります。

斐伊川ひいかわの支流しりゅうの大馬木川おおまきがわをさかのぼった所ところにあり、川かわの流れをせき止とめるかのように、大きな岩いわが川かわの中なかにたくさんころがっている溪谷けいこくです。

どうしてそのような名前なまえが付ついたのでしょうか。

昔むかし、阿伊村あいらに玉たまのように美うつくしいタマヒメノミコト(9)という女神めがみがいました。

ある日ひ、この姫ひめを好すきになった一匹いっぴきのワニが、姫ひめに会うために、はるばる日本海にほんかいから川かわをさかのぼって来きました。この様子ようすを見たタマヒメは、たくさんいわの岩かわで川ながの流れをふさいで、ワニがさかのぼることができないよういにしました。

たくさんの岩が邪魔して、ワニは  
もはや進むことはできません。

ワニは、タマヒメの姿を見ることもできず、  
岩をへだてて、ただただ恋しい思いを

つのらせるばかりでした。

やがて、ワニは舌を震わせながら

すごすごと帰っていきました。

そこで、この地をワニが恋いしたうという

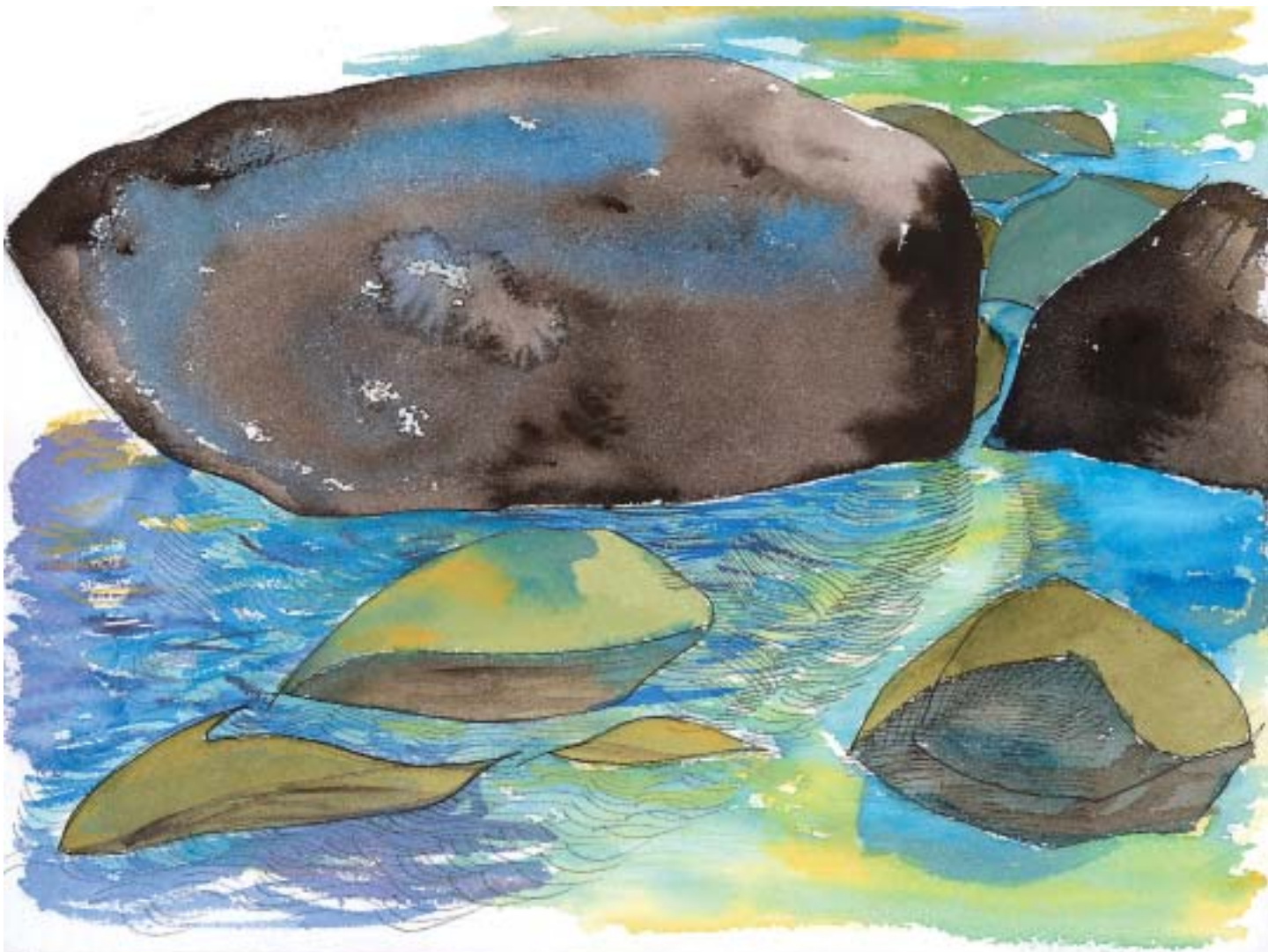
言葉にちなんで「恋山」と呼んだり、<sup>(10)</sup>

ワニが舌を震わせたので

「舌振山」と呼んだりしたのです。

いつしか、ワニが鬼となり、

「鬼の舌震い」という地名が生まれました。



## サダノオオカミと加賀潜戸

松江市島根町に加賀潜戸と呼ばれるほら穴があります。ここは、松江市鹿島町の佐太神社に祭られているサダノオオカミが生まれたと言われている場所です。

サダノオオカミが生まれようとしていた時、母神キサカヒメノミコトが大切にしていた弓矢がなくなってしまうました。

キサカヒメは無事にサダノオオカミを生みましたが、なくなった弓矢のことが気になって仕方ありません。そこで、キサカヒメは祈りました。

「私の生んだこの子が、まさしく私の夫マストラカミの子であるのなら、なくなった弓矢よ、出てこい」  
祈り終わるとすぐに、角でできた弓矢が、中から流れ出てきました。

これを手にしたキサカヒメは生まれたばかりの御子の姿を見て、

「これは私がなくした弓矢じゃないわ」

と投げすてました。しばらくして、今度は、黄金の弓矢が流れ出てきました。

キサカヒメは、それを待ちかまえて取り上げ、

「なんと暗いほら穴なのかしら」

と言いいながら、闇やみに向むかって矢やを放はなちました。

すると、どうしたことでしょう。キサカヒメが放はなった黄金おうごんの矢やでほら穴あなが射いとお通とおされ、穴あながあいて光ひかりが射さし込こみ、中なかが光ひかりり輝かがやいたのです。

このことから、この地ちはカカカと呼よばれるようになりました。

ほら穴あなを射いとお通とおしたキサカヒメを祭まつる社やしろが、今いまも加賀潜戸かのくけとの中なかにあります。



かいじん  
うしおのさと  
海神と海潮郷



雲南市大東町に海潮温泉と呼ばれる温泉があります。

海潮とは、海の水のことです。日本海や宍道湖から遠く離れた山の中なのに、

どうしてこのような海に関わる地名が残されているのでしょうか。

昔、日本海にウノヂヒコノミコトという海の神がいました。

ある時、はるか向こうに父神のスガネノミコトの姿を見かけました。

ウノヂヒコは、父神を大変うらんでいたので、大きな波を起こし、海水を押し上げて、父神を押し流しました。

「うわあー。何をする」

スガネは怒る間もなく、あれよあれよという間に流されてしまいました。

その地まで海水が流れこんだので、海潮郷と呼ばれるようになったのです。

ウノヂヒコが父神スガネを押し上げた跡は、川となりました。

それが赤川です。

「出雲の国の地名のおこり」の神話について

『出雲国風土記』は、奈良時代の七三年に完成した本です。出雲の土地の名前や特産物、昔からの言い伝えが書かれています。すべての国で風土記が書かれたましたが、現在までほぼ完全な形で残っているのは『出雲国風土記』だけです。

奈良時代の出雲の国は、九つの郡に分かれていました。九つの郡の中心となり、今の県庁にあたる「出雲国庁」が置かれたのが、国引き神話に出てくる「意宇郡」です。郡の中はそれぞれ、いくつかの郷に分かれていました。

『出雲国風土記』は、「郡」や「郷」の名前がなせついたので、出雲の神々のお話しによって紹介しています。

【神話に出てきた言葉の意味】

○アジスキタカヒコノミコトと三沢郷。（\*1）

(1) 「立派な鋤を持った、高く輝く太陽の子」という意味です。（\*2）

手で八回つかめるほどの長さ。

(2) 『古事記』のオオクニヌシノカミ。（\*3）

(3) たくさんの島々をめぐること。（\*4）

(4) 現在の斐伊川。

(5) この泉については奥出雲町や雲南市木次町などにいくつかの言い伝えがあります。（\*5）

○恋山

(6) 大きな川からわかれた川のこと。

(7) 奥出雲町高尾より上流の大馬木川の近くと考えられています。

(8) 「玉のように美しい姫」の意味。



鋤（すき）



(10) 『出雲国風土記』には、これ以降の話は書かれていませんが、別の話を付け加えました。(＊8)

○サダノオオカミと加賀潜戸

(11) 加賀潜戸には旧潜戸と新潜戸の二つのほら穴があります。この神話の舞台となったのは新潜戸です。(＊7)

(12) 「岬で生まれた神」の意味。(＊8)

(13) 焼いた石を抱いて死んでしまったオオアナムチ(オオクニヌシ)を生き返らせた神。

(14) 「立派な雄々しい神」の意味。

(15) 光り輝いたことから「カカ」と言われるようになり、それが「加賀」になったと考えられます。

○海神と海潮郷

(16) 「海の神」の意味。(＊9)

(17) 「須我(雲南市大東町須賀)の神」の意味。

(18) この部分は『出雲国風土記』には書かれていません。今も赤川のそばには、ウノヂヒコを祭った宇能遅神社や海潮神社、そして父神スガネを祭った須美祢神社があります。(＊10)

【先生方への解説】

\*1 『出雲国風土記』の写本には、「三津郷」と書かれています。奈良時代や平安時代に書かれた他の本に「三沢神社」と書かれているので、「三沢」または「御沢」であったと考えて良いと思われます。

\*2 父はオオクニヌシノカミ(オオアナムチノカミ)、母はタギリヒメノミコトです。土地を切り開き農業を司る神と考えられています。出雲市大社町遙堪の阿須伎神社、奥出雲町の三沢神社などに祭られています。

\*3 この部分の子供をあやす描写には、一部、高岸郷の話に加えて再構成しました。

\*4 海の島々をめぐったとは書かれていないので、斐伊川をさかのぼってきた可能性もあります。斐伊川流域の山々や丘陵などを八十島と称したのかもしれない。

\*5 このとき、アジスキタカヒコが身を清めた泉については、奥出雲町三沢城跡の三沢池、奥出雲町三沢の三津池、雲南市木次町尾原の前の舞の古井などの説などがあります。最近、前の舞の古井から奈良時代の水を使った祭りの後が発見されました。

『出雲国風土記』の原文では、出雲大社の宮司である出雲国造がその地位に ついたときに、都に上って天皇の前で神賀詞と呼ばれる祝詞を奏上するとき 立ち寄って用いる水であると書かれています。

\*6 天和三年(一六八三年)に書かれた『出雲国風土記抄』には「鰐怖れて舌端を震はして退きぬ」と書かれています。おそらく、後の時代になって『出雲国風土記』の伝承の中に、このような一節が加えられたのでしょう。

\*7 新潜戸は、「加賀神埼」と呼ばれていました。一方、旧潜戸は新潜戸と異なり、小石が積まれ賽の河原のようになっています。

そこは、幼くして死んだ子どもたちのランドセルや人形・運動靴などの遺品が おかれています。

\*8 『出雲国風土記』には、サダノオオカミ以外に「大神」を持って呼ばれる神としては、「アメノシタツクラシオオカミ(所造天下大神)」「ノシロノオオカミ(野城大神)」「クマノノオオカミ(熊野大神)」の三神だけです。

\*9 「海の霊」と見る説が一般的ですが、「海の道」と考える説もあります。

\*10 海潮地区の宮田付近には、「海潮押しとめ池」があったという言い伝えが残っています。

また、宇野遅神社は、現在、雲南市加茂町宇治にあります。かつては赤川に近いうちにあったと考えられています。赤川と後谷川の分岐点付近に「元宮」、赤川沿いに「祝原」の小字が残されており、その近くにあった可能性が あります。

一方、海潮神社は雲南市大東町南村にあります。また、須我神社の境内社として海潮神社の名前が見えます。須我神社の東、八所に「海辺」という字名が 残り、須我神社の境内社である海潮神社の旧社地であるといわれています。

さらに、雲南市加茂町立原にはスガネノミコトを祭る須美祢神社があります。



## 学校の先生方へ

### 一 ふるさと読本『いずも神話』作成のねらい

このふるさと読本『いずも神話』は、『古事記』から三編、『出雲国風土記』から五編の合計八編の神話で構成されています。

神話とは、一般的には世界の始まりを語った神聖な物語だと考えられています。神話という言葉は、ギリシャ語のミュトスという言葉をもとに訳されたものです。このミュトスには、もともと「語られるもの」という意味が込められていました。つまり、神話とは、本来、書かれたものではなく、語られるものであり、世界各地において、古老や祭祀を執行する司祭者によって、神話は語られ続けてきたのです。また、我が国でも、この読本で取り上げた『古事記』や『出雲国風土記』の他に、全国各地に多様な神話が語り継がれてきました。

神話は、祭祀や儀礼を執行する際の際のよりどころとなるテキストの役割を果たしていました。例えば、新しい天皇が即位した後に行われる大嘗祭は、天皇が自らその年に収穫された新穀を

神と共に食する祭祀ですが、この祭祀において行われる儀式の一連の流れは、天皇家の祖先神が、高天原から地上に降臨した神話の再現であると考えられています。

また、出雲大社の宮司である出雲国造は、古代においては国造の地位につくと、上京して天皇の前で神賀詞と呼ばれる祝詞を奏上しました。

しかし、語り継がれることにより、内容が徐々に変わっていくこともあったようです。そこで天武天皇は、稗田阿礼に様々な神話（帝紀）や伝承（旧辞）を詠み習わせました。天武天皇の死後、元明天皇が太安万侶に書き写しを命じ、七一二（和銅五）年に献上された書物が『古事記』です。

『古事記』の神話は、王権の神話ではありますが、神話に語られた内容から、古代の人々のさまざまな考え方、習慣や規範などが盛り込まれていることが読みとれます。『古事記』は上・中・下の三巻から成っていますが、『古事記』にあらわされた神話の三分の一が出雲に関わった神話で占められています。一般的にはこれを「出雲系神話」と称しています。

『古事記』が献上された翌年の七一三（和銅六）年、全国各地名の由来や、特産物、古老の伝承などを記した風土記の編纂

が命じられ、『出雲国風土記』は七三三（天平五）年に完成しました。全国の六十余りの国で風土記が編纂されましたが、現存しているのは、『出雲国風土記』『常陸国風土記』『播磨国風土記』『肥前国風土記』『豊後国風土記』の五つだけで、ほぼ完全な形で残っているのは『出雲国風土記』だけです。

『出雲国風土記』には、神話としての出雲地方の地名の由来が多く書かれています。

このように、出雲地方には多くの神話が伝承されていますが、残念なことに神話そのものが一般に読まれていないという現状があります。

このふるさと読本『いずも神話』では、物語としての神話を原典に即して読んでみて、その中から、神話本来の壮大なスケールとロマンを子どもたちには読みとって欲しいと考えます。

読み終えた後に、もっといろいろな神話を読んでみようという興味をもったり、自分が住んでいる地域の地名の由来を調べてみようとする子どもたちが増えてくれることを期待しています。

ふるさと読本『いずも神話』では、神話自体が語り継がれたものであったことを重視して、原典のもつ音の響きなどの古語の素晴らしさを失わないように、また、わかりやすくしようと

するあまり原典の内容を改変したりしないように配慮しながら、現代語に訳しました。中には小学生が読むには難しい部分もありますが、今まで述べてきた意図をご理解いただき、積極的に読み聞かせの場において朗読していただくことを期待しています。

## 二 『いずも神話』をどのように読み解くか

「神話を読み解く」には、単純に眼を通したり、声に出すという意味だけではなく、一つ一つの神話が、我々に何を語りかけようとしているのか、その事を理解しようと努める事が大切になります。

このような点を踏まえ、個々の神話を読み解くための手がかりとなるように、神話の内容を簡単に解説しておきます。

### (1) 『古事記』の神話

最初の三編「イザナキノミコトの黄泉の国訪問」「スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治」「オオクニヌシノミコトの物

語」は、『古事記』から採ったものです。

まず、「イザナキノミコトの黄泉の国訪問」は、生と死の始まりについて語ったものです。神話のストーリー全体を理解できるようなという配慮から、イザナキ・イザナミの国生みについても簡単に紹介しています。本文では触れていませんが、原典にはイザナキ・イザナミが多くの子どもを持つ、まさしく生の世界が描かれています。また、黄泉の国でイザナキが見た変わり果てたイザナミの姿は、ホラー映画を見ているかのような、まさに死の姿です。しかし、それは古代の人々が死をどのような考えていたかといった点を考えるための素材を提供します。

この黄泉の国の場面については、古墳の横穴式石室を描写したものと考える説が有力です。横穴式石室は、古墳時代後期に作られました。追葬を可能にしました。つまり、一度ある人物を葬った後に再度別の人物を葬るのです。そのため古墳の中に入っていった古代の人々は、当然のことながら、以前に葬られた人物を再度目にするようになります。うじ虫がわき、腐乱した遺体を見て、古代の人々は、死者の恐ろしさを実感した可能性は否定できません。

第二の説として、死後の葬送儀礼の様子を反映しているの

はないかという見解が提起されています。古墳時代には、殯もがりと呼ばれる葬送儀礼が行われました。これは、死者をすぐに埋葬しないで棺におさめ殯宮もがりのみや（喪屋もや）に安置し、肉体から離れた魂を呼び戻すために再生のための儀礼を行いました。七世紀代の倭国の王（大王）の場合、それは一年余りも続いています。時間が経過するにつれ、儀礼の場に参加した人々は、当然、変わり果てた遺体を眼にすることになるでしょう。変わり果てたイザナミの姿を見て、イザナキが逃げ出すという場面には、まさに古代人の死者に対する恐怖の念があったと考えることも可能だと言わけてです。

さて、イザナミが黄泉の国の食事をとること（ヨモツヘグヒ）との関わりで注目されるのは、古墳の石室内に副葬された土師器はじや須恵器すえきです。これらは炊飯器や食器として使われていました。それらを副葬することのもつ意味については、「黄泉の国でも食することに困らないように」という死者に対する気遣いであったと考える見方や、「黄泉の国のものを食べてしまったのだから帰って来ないでくれ」という死者への忌避きひの念があったのではないかと考える見方があります。

このように、古墳における副葬のあり方を考える上でも「イ

ザナキノミコトの黄泉の国訪問」は貴重な神話であると言えるでしょう。

次に、「スサノオノミコトのヤマタノオロチ退治」の神話について考えてみましょう。スサノオがヤマタノオロチを退治する神話の意味するところについては、ヤマタノオロチを斐伊川そのものであるととらえ、オロチ退治の意味するところを、洪水を繰り返す斐伊川の治水を意味するものではないかと理解する説やスサノオがオロチ退治をして剣を得たり、オロチ退治の後、斐伊川が赤く染まったことを重視して、奥出雲のタタラ製鉄集団と大和との抗争を意味する神話ではないかとする見解も有力です。

しかし、これらの見解の問題点は、いずれもオロチ退治の話の限られた部分のみに注目して組み立てられたものであり、残念ながら推測の域を出ていません。たとえば、出雲のタタラ製鉄について言うと、確かに『出雲国風土記』では出雲国の山間部は、古代以来、多くの鉄を産出した場所として記されています。しかし、地形を大きく改変するような大量の土砂を必要とする鉄穴流<sup>かんな</sup>しなど大規模なタタラ製鉄が本格的に展開するのは、近世以降のことであり、その中でヤマタノオロチの神話が

再解釈されて、タタラ製鉄の由来を語るために利用された可能性も捨て切れません。そのこと自体も、近世における人々の神話に対するイメージを理解する上で重要な研究対象となります。

また、古代の斐伊川が洪水を起こすような「暴れ川」であったかどうかについては、近年の出雲西部の発掘調査の成果を見ても、検討の余地があります。斐伊川が天井川のようになり、しばしば氾濫を起こすのは、むしろ近世以降のタタラ製鉄の盛行による大量の土砂の流出が原因と考えられます。

タタラ製鉄説や治水説の陰に隠れて意外と注目されてこなかったのは、この神話に登場する神々の神名です。例えばクシナダヒメは厳密にはクシイナダヒメと認識された可能性があり、靈妙な稲田の姫と解することができるように、農業との関わりも想定できます。いずれにしても、オロチ退治の神話の意味するところについては依然として多くの謎が残されています。

また、この神話は天皇家の国土統治の正当性を主張した神話の一コマであることも忘れてはなりません。本文中に草薙<sup>くさなぎ</sup>の剣がアマテラスのもとへ献上されるといふ話が出てきます。アマテラスは天皇家の祖先神であり、この剣は後に「三種の神器<sup>しんぎ</sup>」として天皇家において大変重視されるものです。スサノオがこ

れを自分の手元に置かずアマテラスのもとへ献上したことの意味は、結局、高天原から追放されたとはいえ、スサノオはアマテラスに臣下しんかの礼をとらざるを得なかったことを示しているのです。そう言った意味では、このヤマタノオロチ退治の神話は、壮大な叙事詩であると同時に、極めて政治的な要素を含んだものと言えるのです。

次に「オオクニヌシノミコトの物語」について説明しましょう。この物語は内容が多岐にわたっています。ここでは、オオナムチはどのようにしてオオクニヌシになったのかの紹介に絞りました。

オオナムチがオオクニヌシへと成長していくストーリーは、地域社会において、一人の人間が共同体の中でいろいろな慣習を学び、生きていく上での必要な知恵を身につけて、やがて首長になっていくそのプロセスを意味しています。その中で八十やそ神がみ（兄弟神）やスサノオの果たした役割も浮かび上がってきます。彼らは決してオオナムチをいじめていたわけではないのです。集団社会の一員として認められるための様々な慣習を、この神話から読みとってください。

なお、この神名の「オオナムチ」には、「偉大なる鉾山の

穴の貴人」、そして「オオクニヌシ」には、「偉大なる国主」の意味が込められています。この国主には、国の支配者といった意味が込められています。オオクニヌシの場合、神話の中の葦原中国わしはらのなかつくにという国の国主でした。

オオクニヌシは、自身の国を結局高天原のアマテラスの子孫に譲ることになります。その代償として建てられたのが出雲大社ということになっています。

この国譲りのもつ意味については、出雲と大和の戦いの反映ではないかという説もありますが、『古事記』の神話を作品に即して読む限り、オオクニヌシは、国を譲らざるを得なかったのです。

オオナムチが八十神に殺された時、この神を治療するため高天原から女神達がやって来たことが書かれています。また、オオクニヌシが国作りを行う時にコンビを組んだのが高天原のカミムスヒの子、スクナヒコナでした。つまり、オオクニヌシの国作りはオオクニヌシの力だけでなされたのではなく、高天原の力があって初めて達成されたのです。ですからオオクニヌシは国譲りをしなくてはならないというのが、『古事記』の論理なのです。そこに「出雲勢力の敗北」といった「史実」を読みと

る行為は現状では困難であると言えます。

この他、奈良時代の正史である『続日本紀』によれば、大隅国において海底の火山が爆発し、オオナムチ（＝オオアナムチ）が新しい島を作った話などが記されています。この神に関わる神話や伝承は、広く列島各地に分布しています。

## (2) 『出雲国風土記』の神話

「国引き」以下の五編は『出雲国風土記』から採ったものです。『出雲国風土記』は地誌であり、地名の由来の説明が大きくなウエイトを占めています。

「国引き」はその冒頭を飾る神話ですが、従来、国引きについて取り上げた書物の多くは、具体的にどこから国を引っ張ってきたのか、その点を説明することに終始してきました。しかし、この神話の素晴らしいところは、むしろ「霜つづらをくるとやくるや」とか「河船をもそろもそろ」といった形で繰り返し繰り返し語られる古語の部分なのです。この部分を分析することで、国引き神話成立の基盤となった民間伝承が浮かびあがってきます。

本文中では、小学生にわかりやすいように「大きなすきを手にとって」と書かれています。『出雲国風土記』には「乙女の胸鋤取らし」と表現されています。「乙女のような情報を引き出すことができるでしょうか。「乙女の胸鋤」とは乙女の胸のように幅広い鋤のことですが、これを手にしてざくりと大地を切り分ける所作は、何を暗示しているかと言えば、地域社会における大規模な開発行為と考えられます。鋤は大量に集団で使用する時は、丘をも「すきはねる」ような威力を発揮する道具と考えられていました。『出雲国風土記』には、「五百津鋤々猶取らしに取らして天の下造らし大神」という言い回しが見えます。

また、「大きな魚の身をさくように」は、原典では「大魚の支太衝き分けて」と表現されています。

「大魚の支太衝き分けて」という一節の背後には、古代の漁民達が共同で行う漁業労働の姿が見え隠れします。古代の出雲では、ワニやシビ（＝マグロ）などの魚を獲っていましたが、その方法はまず矛を高く挙げて、波間に呼吸する度に開閉する魚の支太、すなわち鰓を一気に突くことでした。「大魚の支太衝き分けて」という言葉の背後にそのような魚と格闘する漁民

の姿があったのです。

このように見ていけば、国引き神話は、ただ単に遠い国から余った土地を引っ張って来たことだけを語ったものではないことがわかります。国引き神話は、民間伝承を基盤としながら、そこに出雲国造の統治や権威にもとづく加筆が加わりました。

国引き神話は、意宇という地名の由来を語るはずなのに、国引きした後の神の発した言葉が「おう」ではなく「おえ」となっているのも、あるいはそのような複雑な成立過程を意味するものかも知れません。

この国引き神話の語られた場所については、祈年祭の場であるとする説や出雲国造の即位式の場であったという説もありますが、いずれにしても「語部」と呼ばれる人々が重要な役割を果たしていたことだけは事実でしょう。

古代出雲には、多くの語部がおり、大嘗祭の儀式の場においても出雲の語部は重要な役割を果たしました。語部はそこで国引き神話のような出雲の「古詞」を奏上したと思われます。

「出雲の国の地名のおこり」として選んだ残りの四編のストーリーについても、そのような語部によって語られていたものを採録し編集し直した可能性があると思います。

神話は本来語り継がれてきたものであることを先に述べました。このふるさと読本『いずも神話』を読まれる先生や保護者の方々は、どうか現在の神話の「語部」として、一人でも多くの子どもたちに、島根県に伝承されてきた多くの神話のおもしろさや魅力を語り継いで欲しいと願っています。

### 三 もっと学びたい人のために

最後にこの本をもとに指導にあたられる先生や保護者の方々が、さらに神話について詳しく調べることを想定して、いくつかの参考文献を紹介しておきましょう。このふるさと読本『いずも神話』の執筆にも参考にさせていただきました。

#### ◎神話それ自体を記したもの

- 日本古典文学大系『古事記 祝詞』（岩波書店）
- 日本思想大系『古事記』（岩波書店）
- 新潮日本古典集成『古事記』（新潮社）
- 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館）
- 三浦佑之『口語訳古事記』（文芸春秋社）
- 日本古典文学大系『風土記』（岩波書店）
- 加藤義成編『修訂出雲国風土記参究』（今井書店）
- 新編日本古典文学全集『風土記』（小学館）
- 萩原千鶴『出雲国風土記』（講談社学術文庫）
- 関和彦『出雲国風土記註論』（一）～（九）

（一）～（七）については、島根県古代文化センターの研究紀要『古代文化研究』四号～一〇号に連載され、（八）・（九）については単独の印刷物として、島根県古代文化センター調査研究報告書一五・二五の形で刊行されています。

#### ◎神話一般及び出雲の神話を解説したもの

- 大林太良『神話学入門』（中公新書）
  - 西郷信綱『古事記の世界』（岩波新書）
  - 上田正昭『日本の神話を考える』（小学館）
  - 吉田敦彦『日本神話の源流』（講談社現代新書）
  - 松前健『出雲神話』（講談社現代新書）
  - 神野志隆光『古事記 天皇の世界の物語』（NHKブックス）
  - 石母田正『神話と文学』（岩波現代文庫）
- 神話研究の著作はたくさんありますが、ここでは比較的手しやすい新書本や文庫本について紹介しました。より深く神話を研究をしたい方は、それらの本の註や巻末に掲げられている参考文献を読んで先に進まれるとよいと思います。



執筆に関わっていただいた方々

(職名は平成17年3月発行当時のもの)

編集委員

藤岡大拙	島根県立島根女子短期大学	学長
有馬毅一郎	放送大学島根学習センター	所長
石破洋	島根県立島根女子短期大学	教授
大日方克己	島根大学	教授
豊田有恒	島根県立大学	教授
関和彦	國學院大學	講師

執筆委員

本文	竹崎葉子	松江市立第一中学校	教諭
	小笹寿美	松江市立第四中学校	教諭
	岩田直樹	松江市立本庄中学校	教諭
	曾田和彦	安来市立伯太中学校	教諭
	丹羽隆	松江市立法吉小学校	教諭
	和泉まゆ子	松江市立乃木小学校	教諭
	西村英広	宍道町立宍道小学校	教諭
	五明田典子	島根県立松江教育センター	指導主事
	森田喜久男	島根県教育庁古代文化センター	主任研究員

注釈・解説	森田喜久男	島根県教育庁古代文化センター	主任研究員
	高橋一郎	島根県教育庁義務教育課	指導主事

表紙・挿絵	瀧野真理子	島根県立青少年の家	社会教育主事
	松本真理	島根大学附属小学校	教諭

事務局

島根県教育庁義務教育課・古代文化センター

ふるさと読本「いずも神話」

平成17年3月 発行

平成24年1月 改訂

発行 島根県教育庁義務教育課  
島根県松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 黒潮社



島根県教育委員会